

## 書評

### ピケティ「21世紀の資本」 発展・開発を超長期で見る視点の重要性

林 薫  
文教大学教授

Thomas Piketty, *Le Capital au XXIe siècle*, Seuil, 2013

(英訳) *Capital in the Twenty-First Century*, The Belknap Press of Harvard University, 2014  
(Translated by Arthur Goldhammer)

(邦訳) 『21世紀の資本』(山形浩生訳) みすず書房 2014年12月

今やピケティのこの大部の著書に触れなければ教室での授業や、専門家のパーティの会話にも支障をきたすような状況である。原著で700ページもあるような大書がこれだけ話題になるというのは異例ともいってよい。なぜ、これだけ話題になるかといえ、グローバル経済による格差の拡大がもたらす問題の深刻が共有されてきているからである。

この大書のポイントは次のようにまとめられるだろう。

①「資本収益率  $r$ 」は「国民所得成長率  $g$ 」を上回る ( $r > g$ ) というものである。「資本蓄積が進行すると資本収益率が通減し『定常状態』」になり、資本と労働の収益率は等しくなる(新古典派)、「経済成長の初期には所得の格差は拡大するが更なる成長にともなって格差は縮小する(クズネッツの逆U字仮説)」という通説的な成長理論に対し、資本主義経済においては資本収益率が経済成長率を上回るため、格差は長期的に拡大するとする。

②先進諸国では資本/所得比率が戦後の一時期低下する(資本収益率よりも相対的に国民所得成長率が高くなる)現象が見られたが、これは成長率が高かったため、この時期、日本を含む多くの先進国で所得の向上と格差の縮小、すなわち中産階級化が進行した。しかし、1980年代以降、成長率が低下するとともに資本/所得比率が大きくなり、格差が拡大し現在に至っている。

日本を振り返ってみても、戦前は少数の資産家に富が集中し、この結果として貧困層、貧困地域の窮乏化からファシズムの台頭に至り、戦後は所得の再分配などを通じて「一億総中流化」が進行したが、最近では格差が深刻な問題になっているという歴史的経験に合致している。

この著作の真価は理論的な解明、モデルを用いた分析というよりは、10年以上をかけて行われた調査により、各国の過去200年ほどの所得、資産のデータを各国の納税記録などをもとに再構成し、実証分析を行ったところにある。この方法論は途上国の開発・発展の研究者に対しても示唆するところは大きい。これまで、開発・発展の議論

はもっぱら戦後の途上国ならびにその参照としての先進国の戦後の発展過程に視野が限定されている場合が多かったが、最近、ジャレット・ダイヤモンドの「昨日までの世界」、ロバート・C・アレンの『なぜ豊かな国と貧しい国が生まれたのか』、グレゴリー・クラークの「10万年の世界経済史」などの超長期の視野で人間の経済を考える著作がよく読まれるようになってきている。これらの論考では産業革命以降の経済発展およびそれにともなって生じてきた社会の変化が相対化されている。

ピケティもこのような長期的なスパンを扱った分析、考察の系列に属する。資本主義というのは長い人類の歴史から見ればごく最近の出来事であり、資源や環境の制約から長期的に持続することは難しく、全体としては短期間の「あだ花」で終わる可能性が高い。資本主義の終焉については水野和夫「資本主義の終焉と歴史の危機」で「投資のフロンティアは消滅しつつあり、成長率の低下は避けられない」と論じられている。もしそうであるならば、ピケティの議論と組み合わせれば資本/所得比率はさらに高まり、不平等化はさらに進行するだろう。金融資本主義化がさらに進み、資産を保有する階層はリスクの負担ができるため、さらに資産を蓄積していくことが可能である。ファンドマネジャーが破格の報酬を得る一方で、多くの仕事はICTで代替され、機械で代替できない対面型サービス産業などの生産性が低く、したがって賃金が低く労働条件も悪い雇用に、多くの人々が従事せざるを得なくなる。その問題の一端は日本でも「ブラック企業」の問題として顕在化しつつある。

ピケティは格差の問題への対応として、資本課税およびその前提となる資本の動きのグローバルなモニタリングを挙げている。これは、極めて穏当かつ現実的な提案である。これらの一部は既に「トービンタックス」、「国際連帯税」などの形でこれまでも議論が行われてきた。先進国、途上国の抱える様々な問題点を整理し、またそれぞれの持ち場へ戻っていく「一次集合場所」としての意義がある。グローバル経済の中では「開発」あるいは「途上国の貧困」という問題のフレーミングはもはや妥当ではないのかもしれない。ピケティの用いたデータはWEBサイト

<http://piketty.pse.ens.fr/en/capital21c2> からダウンロード可能である。今後知識と情報の共有が進むことが期待される。